

第3種郵便物認可

避難母子の「里」守って

フクシマは いま



入所者から「会津のお母さん」と慕われる助産師の二瓶さん(右)。気持ちよさそうに眠る生後11日目の樹(いっき)ちゃんを、母親の小豆畑百合子さんと優しく見守る。19日

産後まもない母親と赤ちゃんを受け入れ、助産師が共に生活しながら24時間ケアをする施設が福島県西部の会津若松市にある。東京電力福島第1原発事故の後、避難者ら母子に寄り添い、放射能と産後のストレスから守ってきた。しかし、運営費が6月末で切れる見込みで、存続が危ぶまれている。
(東京報道 細川智子)

24時間産後ケア 会津助産師の家

「会津助産師の家」おで受け入れ、50〜70代のひさま。住宅街にある助産師5人が交代で寝泊まりし、産後のケアにあたる。産後まもない県内の母子を1日3組ま



入所は最長2週間、1泊3食が付いて3千円。会津若松市は県内でも放射線量が低く、ゆったり「里帰り」した気分でごせる。「無事に生まれてくれるか、放射線の影響はないかと心配ばかりで、産後、おひさまは昨年、日本助産師会福島県支部が開

運営費支援6月限り 募金呼び掛け

設し、年明けから本格的に受け入れを始めた。運営費は、被災地の妊産婦を支援する東京都助産師会のプロジェクトから、全面的に支援を受けてきた。これまで、町全体が避難指示区域となった双葉町からの避難者をはじめ20組が利用。長引く避難生活や低線量被ばくへの不安から、出産・育児の負担感が増しており、「ストレスでおっぱいが出なくなつた」「実家が線量の高い地域にあって里帰りできない」といった母親たちが、県内各地から身を寄せた。入所以外でも、「放射性物質が不安なので、粉ミルクではなく自分の母乳で育てたい」などと、母乳育児の相談も寄せられている。県内で被災母子への支援のため、格安で入所受け入れを行っているのは、おひさまのほか助産院2カ所のみで、県支部は「24時間対応の駆け込み寺になっている」と話す。ただ、おひさまへの都助産師会の支援は6月末で終了。県支部は募金を呼びかけているが、7月以降の見通しは立っていない。運営の継続には、人件費などで月100万円程度かかるという。助産師の代表、二瓶律子さん(70)は「産後うつや虐待は起きてからでは遅い。出産前後の母親たちを支える地域の拠点として何とか残したい」と考えている。募金についての詳細は日本助産師会福島県支部のホームページか、担当の石田さん(080・2821・3212(午前9時半〜午後5時)へ。